

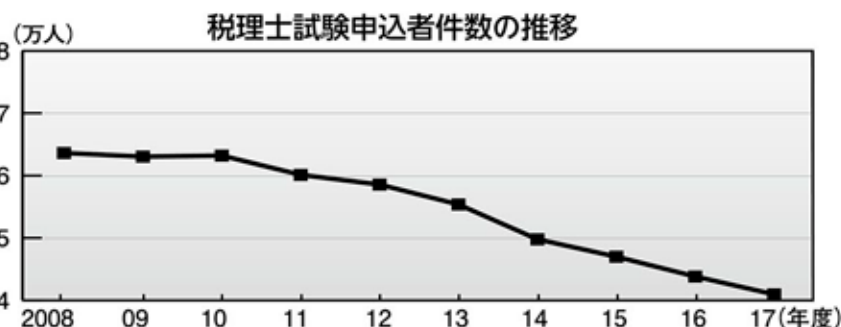
# 業界の危機 受験者数の減少を止めろ!

税理士試験の受験者数減少が止まらない。日税連や税理士会では、さまざまな工夫を凝らして税理士の魅力をアピールしているが、残念ながら思った効果が得られているとは言い難い。それどころか最近では、「ITの発展によって近い将来なくなる仕事」にランクインするなど、不名誉な形で注目されるに至っている。数の減少は業界全体の弱体化を招く。それは、税務調査では納税者の盾となり、現状税制の問題点を建議として政府に突き上げる、日本で唯一の専門家職能の危機へとつながる。業界が一丸となって対策にあたる時だ。

## 2050年の合格者は100人に?

2017年度の税理士試験の願書出願数は4万1242人で、前年比で7%減、5年前と比べると3割も落ち込む結果となった(グラフ)。2010年から2015年の5年間で区切るとおよそ25%減。

仮にこのペースで減少が続くと2020年には3万5000人、2030年には2万人を切り、そして2050年には6000人にまで落ち込むことになる。去年の願書提出者のうち、5科目合格した人の割合は1.7%だったことを考えると、このまま減少が進めば2050年の合格者は単純計算で100人という、なんともおぞましい予測が立つ。もちろん、数字上の単純なシミュレーションであり、ゼロになる



も全てこなし。そうして一人前になっていく」と自身の経験を元に述べ、そのうえで給料については「仕事を覚えさせるのだから授業料をもらいたいくらいだが、労基法上の問題があるので給料を払っている。もちろん能力に応じてだから最初は最賃に近いものになる」と、安月給も理に適

【表】主な士業試験における出願者数の推移(人)

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2010-2017
税理士	62996	59975	58453	55332	49876	47145	44044	41242	65.4%
公認会計士	25648	23151	17894	13244	10870	10180	10256	—	40.0%
司法書士	33166	31228	29379	27400	24538	21754	20360	18831	56.7%
司法試験	11127	11892	11265	10315	9255	9072	7730	6716	60.3%
社会保険労務士	70648	67662	66782	63640	57199	52612	51953	49900	70.6%

※各省庁の資料などを元に作成 ※公認会計士は2010年から2016年までの増減

たものだと語った。そのうえでT氏のような税理士の卵が抱える不安について、「資格だけで食っていけると思っているのが甘い」と一蹴した。

R氏のほかにも同様の主張をする税理士は多い。だが、その「正論」が現在の受験者数の減少を招き、結果として業界全体が萎んでしまっているのでは元も子もない。

さらに、こうした「ブラック」の風評以外にも、税理士試験を避ける原因になっているのが試験そのものの不透明さだ。前出のT氏と同じ予備校に通う、やはり30代の男性Y氏は、「受験の結果が分からないことが次年度へのモチベーションを下げ

ことがない以上、必ず一定のラインで歯止めはかかる。とはいえ、それがどこの時点なのか、現状では見通せていない。

日税連では、若者に向けて税理士の魅力を伝えるべく、ホームページで読めるウェブコミック「新人税理士 白石桜ががんばってます!」や、動画「税理士のしごと〜What's税理士」などを掲載するほか、学生向けのパンフレット「税理士って?一生の仕事を探すなら」を作成して普及に努めているが、思うような効果は数字に表れてはいない。

受験者数の減少は、7月27日に開催された日税連総会での記者質問にも上がり、これに対し神津信一会長は「小中学校での租税教育を進め、大学での寄付講座に力を入れる」と語っている。

### 「ブラック業界」に抱く不安感

受験者数の減少については少子高齢化による人口減によるものという見方もあるが、絶対数としてのそれはあるとしても、しかしそれでも現状は減りすぎだ。各種データを見ると、税理士に限らず、いわゆる難関と言われる士業で減少が続いていることが分かる(表)。かつては「不況に強い」と言われた難関士業だが、現在はその魅力や「旨味」が見えにくくなっているようだ。

都内の予備校に通う会社員の男性T氏(30代)は、インターネット上に「税理士は食えない職業」といった書き込みを見るたび「このまま勉強を続けていいのか悩むことがある」と、努力が報われないことへの不安を漏らした。

そのうえ、資格を取得して会計事務所に勤めても給料は安く、しかもハードな労働で「ブラック事務所も多いと聞く」(同)と、さまざまなうわさに揺れている。

「ブラック」の是非はともかく、業界内に昔ながらの徒弟制度の雰囲気が残っている部分があるのは否めない。都内で10人ほどの所員を抱える税理士のR氏は、「若いうちは汗をかいて当たり前。自分の頃は3日の徹夜も普通で、仕事以外の雑用

」と語る。税理士試験は各科目とも満点の60%が合格基準と言われているが、受験者は試験の正答も点数も採点基準も知ることができず、一方的に合否を伝えられるだけだ。Y氏は「税務署OBの一定枠を確保するために合格者数を調整しているのではないかと勘ぐってしまう。5年も10年も受験を続けている人がいるが、自分はそのままで続くかどうか分からない」と不満を述べる。情報公開がこれだけ進む時代に、税理士試験の不透明さは極めて珍しいシステムだ。2~3科目合格したものの、途中であきらめてしまう人が多いというのも無理はないことかも知れない。(3面につづく)

## TOPIC 日税連が定期総会 神津会長2期目に突入



日本税理士会連合会は7月27日、定期総会を開催し、次期会長に現会長の神津信一氏を選任した。写真は来賓として参加した麻生太郎財務相とのツーショット。麻生氏はあいさつで「AIの発展で今後は税理士の仕事は奪われる」と警鐘を鳴らした。(詳細2面)